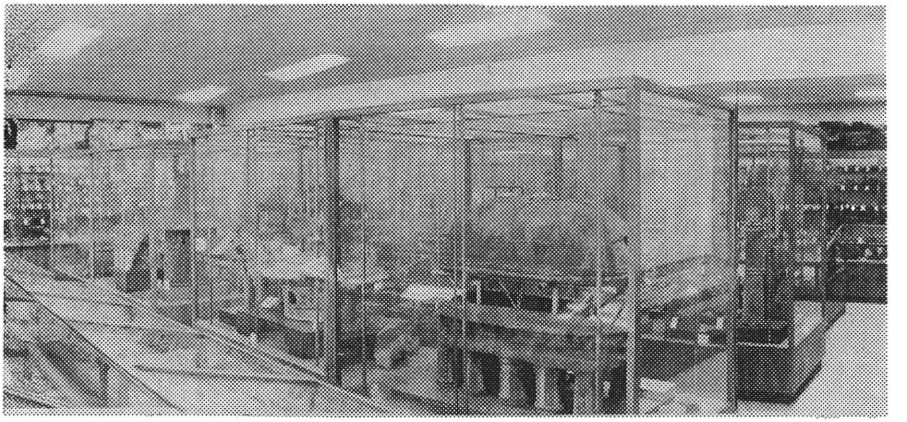


私立大学の博物館 ③

國學院大學考古学資料館

／青木　豊（國學院大學考古学資料館学芸員）

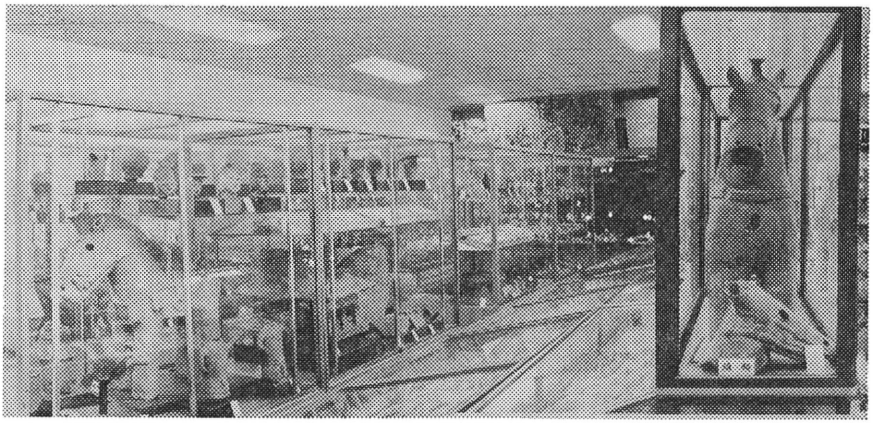
概　要

國學院大學考古学資料館は、昭和三年四月に、現在本館名誉館長である樋口清之博士により、本館の前身である國學院大學考古学資料室として開設された。

昭和二十六年に博物館法の制定に伴い、早くも翌二十七年に博物館相当施設に認定され、昭和五十四年にはさらなる発展を期して、國學院大學考古学資料室から同考古学資料館へ名称を変更し、現在にいたっている。

本館は、國學院大學に付属する施設であり、考古学・博物館学の研究機関であるとともに、本学の考古学・博物館学専攻生の実習の場としての役割を果たしている。さらに、考古学・博物館学の一般社会への啓蒙にも努め、無料公開はもちろんのこと、一般市民を対象とした公開講座も開催している。

収蔵資料は、主にわが国の旧石器時代遺物・縄文時代遺物・弥生時代遺物・古墳時



國學院大學考古学資料館展示室

代遺物・歴史時代遺物等の考古学資料を中心とし、それに国外考古学資料・民俗資料等も収蔵し、収蔵点数七万余点を数える。

展示室には常時約四〇〇〇点余りの資料を展示し、旧石器時代より歴史時代まで時代順に実物資料展示を基本としている。展示にあたっては、不特定多数の研究者・参観者の要求に応じられるよう一時期・一地域に偏ることのないように心がけ、収蔵展示としている。

次に、本館所蔵の代表的遺物の紹介を行う。

微隆起線文土器

本資料は、長野県須坂市石小屋洞穴出土で、縄文時代早創期に比定され、わが国の最古の縄文土器に属する。

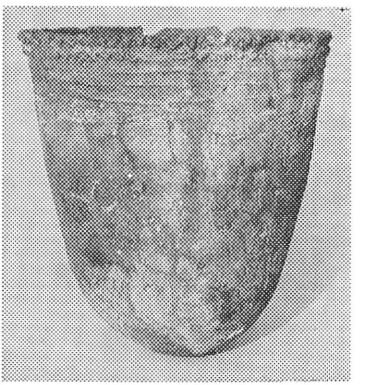
縄文土器は、わが国の歴史上最初の土の焼き物であり、その出現は革命的な事件といえるものであった。縄文土器出現以前、すなわち旧石器時代は、物を煮沸する容器がなかったので煮沸行為はなく、焼くか生で食する以外に方法はなく、おのずと食物対象も限定されていた。今日の日常生活の中でなべ・かまのない生活を想定すれば、縄文土器の有する歴史的意義がいかに多大であったかが理解できよう。さらに加えると、生食が困難な野生植物類や、焼くには不適当であるドングリ・トチ・カシといった粉食類も食物対象となり、その食物範囲は大幅な拡充をもたらすものとなった。

このような、土器使用による食物資源の多角的な利用と効率的な摂取は、縄文時代以前においては日々の食料獲得のためにもっぱら費やされたエネルギーを一部温存し、生活自体に余裕を生じ、ひいては縄文文化の内容充実の大きな原動力となってい

ったのである。

また、食料の増加は、人口増に直結するものでもあったことはいうまでもない。

徴隆起線文土器



石　枕

本資料は、千葉県市原市姉ヶ崎二子塚古墳出土で、古墳時代（六世紀前葉ごろ）の所産で、国の重要文化財に指定されている。

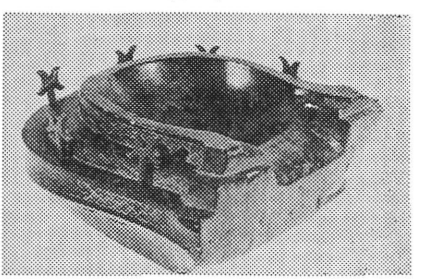
石枕は、古墳に埋葬される遺骸の頭部を載せる目的で作られた石製の枕で、上面に馬蹄形のくぼみが設けられている。石枕の周円は三段の階段状に削り出され、その側面に直弧文が描かれており、ほかに類例を見ない極めて貴重な資料である。

直弧文とは、直線と弧線を組み合わせたわが国独自の文様で、古墳時代の石棺・大刀・鍔・埴輪等に表現され、その目的は特殊な呪術的意味を込めたものと考えられているが、その詳細はいまだ不明な文様である。

人と枕の関係をみると、まず人は、睡眠をとるとき枕を使用する。これは人間だけの習慣でもある。次に前句の実利面だけではなく、人間の最も重要な部分である頭に魂が宿ると考えた古墳時代人の産物でもあったのであろう。

すなわち、まくらの語源は神霊が宿る――真座（まくら）――であったと理解されるところから、死後の世界へも枕を携えたので

石　枕



あろう。

埴輪馬

本資料は、埼玉県行田市出土で、古墳時代後期（六世紀）の所産である。

埴輪は、古墳時代後期になると関東地方でも盛んに作られるようになり、その数量は爆発的に増大するとともに、人物・動物・家・武器・武具と種類も増え、なかでも動物埴輪は馬・鹿・猿・犬・水鳥・鶏とバリエーションが豊富である。特殊なところでは、応神天皇陵の周濠から一般にいう埴輪とはやや異なる小形土製品であるが、鯨・イカ・タコ・フグなどが検出されているのには驚かされる。

埴輪馬

埴輪は、いうまでもなく日常生活遺物とは異なり、古墳の葬送の儀礼品として造形されたもので、なんとなく稚拙でユーモラスであり、牧歌的ともいえる情感さえ漂い、見る人を魅了する美しさと素朴感が存在する。

埴輪馬に関する記事が、『日本書紀』の雄略天皇の項に記載されている。概略は次のとおりである。

河内飛鳥戸郡の人・田辺史伯孫が、古市郡の人・書首加竜の妻である自分の娘のもとに孫の誕生祝いに行った帰りの夜道、誉田の応神天皇陵のほとりにさしかかったとき、赤毛の馬に乗った人に出会ってその馬の立派なのにほれ、馬を取り替えてもらい、喜んで家に帰った。ところが、朝になって昨夜の赤毛の駿馬が土馬に変わっていることに驚いて応神陵に行ってみたところ、昨夜取り替えた自分の馬が、陵側に立て並べてある埴輪馬に交じっていたというものである。

古墳時代の馬は、農耕馬ではなく貴人を乗せる乗馬であり、戦闘に用いる軍馬であって、当時の社会においては極めて重要なものであった。いずれの埴輪馬を見ても、高くたてがみを刈り整え、面繋を装着し、口には轡が見られ、各所に鉸具が認められる。背には鞍を装い、泥障の上には輪鐙を下げ、尻繋には杏葉が飾られるなど、まさに儀杖用の化粧馬が表現されている。